



インタビュー 西川正雄氏に聞く

企画・聞き手・採録 橋場 弦

とき '87年6月12日

ところ ルオー

1. 『現代史研究の模索時代』

クリオ：先生が現代史研究を志されたのは、卒論を書かれた時と考えてよいのでしょうか。

西川：そうですね。ハイ。

ク：どういったテーマで……

西：卒論のテーマは1922年のラパッコ条約という、ソ連邦とドイツとの最初の国際条約です。

ク：その卒論の内容について、何でもよろしいのですがお聞かせ願えませんか。

西：いやその、いつから現代史研究（を始めた）かと言われたけどね、おそらく、はじめから僕は18世紀以前、少なくとも17世紀以前をやる可能性はなかつただろうと

思う。

ク：ハハア。

西：これは高等学校の先生の影響もあるんですけど、さしあたりドイツをやろうとは思っていた。で、その場合のドイツとは、19、20世紀のドイツ、そしてファシズムとか社会主義とか、そういうことでしたからね。19、20世紀のドイツというところから出発して……。それから、僕が学生のころというのは、今のコトバでいう現代史とは、アカデミックな意味ではまだ歴史学の中に入っていなかったという感じが強いんですね。変なコトバを使えば、市民権を得ていない、そういう分野だったんですよ。

政治的な雰囲気というかな、政治の季節でもありましたしね、何か現代史というのはこう、イデオロギー的であったり政治的であったりするんで、学問の分野としては未だ十分に認められていなかった。また一方で政治的实践から一步退いたような研究というのは、またバカにされる、というか、そうあってはならないという、そういう雰囲気だったでしょう。

だから、中世史、近代史、現代史と並んでいて、どれをやりましょうかというような、そういう選択ではなかった。

ク：ではもう最初からファシズム研究に……

西：そうですね、やはり漠然とロシア革命なり、一方では逆にファシズムというのが、非常に現代史の大きな問題としてあって……。だけれど直接それに立ち向かおうと思ったら気の遠くなるようなことですよ。で、どうしたらよいか。研究の伝統はないし。で、四苦八苦して……。村瀬興雄先生のお宅に押しかけて教えを乞うたりしました。

まあラバッコ条約というのは……同級生にラバッコ条約をやった人がいるんですよ、同じ時期に。何かそういう人たちとしゃべっているうちに、そいじゃあやってみようか

なと思ったくらいで。

ただ敢えて理屈をつければ、世界で最初の社会主義政権、他方は第一次大戦で負けたドイツですね。その間に何故条約が結ばれたか。それについてはE・H・カーが非常にすぐれた独ソ関係史を書いていますね。第二次世界大戦以降も、ドイツやイギリスでいくつかのおもしろい研究が出ていたんです。そういうのを参考にして一所懸命外交文書などを、見よう見まねでつかって書いてみたってわけですよ。

ク：大学院に入られてからは……

西：うーんとね、大学院に入ってから、また論文のテーマを何にしたらいいかわからなくて、よくそのころ友人どうししゃべっていたんですけどね、学生運動とかそういう次元では、帝国主義とかなんとか、こう気軽につかっていたけど、さて論文を書くという段階になってやってみると、帝国主義の何たるかなんて何も知らない。とてもそうおいそれと、帝国主義なんていえないな、なんて話をしたのを覚えていますけどね。

で、大学院に入ってから、じゃあ何をテーマとするか、ずいぶん迷って……。ある学説ができ上がっていて、先学の仕事がある分野だとね、一当時でしたら、社会経済史がそうだと思いますけれど、一そうすると、彼がここをやっているから自分はここをやろうという形でできるんでしょうけれども、現代史はそうじゃなかったですから、迷いに迷って、これもまた、皆としゃべっているうちにやることになったのかなあ……ローザ・ルクセンブルクをとり上げたんです。

ローザ・ルクセンブルクというのは当時もちろん注目はされていましたよ、戦前から。『獄中からの手紙』で知られてはいたけれど。経済学の分野では資本蓄積論などももちろん読まれていた。だけれど判断の絶対とっていいほどの基準としてレーニンというものがあつた、そういう時期ですね。レーニンがルクセンブルクについて言っていることが、抵抗なく受け入れられていた、そういう時期です。当時ドイツ民主共和国において

は、いっそうその傾向がつよくでてましてね。ローザ・ルクセンブルクの「誤った体系」というような位置づけすら —それはスターリン時代から出てくる一つの見方なんですけど、それがまかり通っていた、そういう時期なんですね。それにとくに異を立てようとしたわけではないんだけど……。

たぶん、丸山真男先生の政治思想史のゼミなんかに出てたというのが、一つは刺激になっているし。それから言うまでもなく、帝国主義の時代に関心をもって、それをやっ
ていこうという点では江口朴郎先生の影響が大きい。

何故そう思ったか、自分でもよくわからないスけど、まあレーニンの見地なり、いろんな政治的見地からローザ・ルクセンブルクを断罪するのではなく、実際、何を考えていたのかを調べてみようというところから出発して。経済理論は難しかったからやらなかったんですけどね。むしろ政治思想の面でたどってみたい。その当時、今と比べれば文献も史料もなかったんですけど、まあなんとかあちこちから集めてそれなりに、ともかくまとめ上げることはできたと思います。

ク：卒論を書かれたのは、先生もおっしゃいましたけど、ちょうど時代的にいうと政治の季節ということになりませんか。

西：卒論は1955年くらいですから、まあ政治の季節は少しおさまっていた方なんです。それでも自治会活動で勉強はなかなかできませんでした。僕なんか、ネオ・アカデミズムだというような批判がきこえてきたこともありました。ええ。その前だったらもっと政治的実践が激しかったですから。

ク：そういう動きと、先生の御研究とは何らかの形で、無関係ではなかったのではないですか？

西：内心では非常につながっていますね。

ク：どういったところでつながっていたか、表現しにくいところでしょうけども……。

西：非常に大ざっぱに言えば、やはり社会主義というのは目指すべき目標だったんですよね。うん。そしてソ連邦というのは現にそれを実現した存在でしょう。だけど（ソ連について）芳しくないことがらというのも見えてくるわけでしょう。それから '56年のハンガリー事件なんかありますね。それでも多くの人々には 一僕を含めてだけども一何とかこう善意に理解しようとする心情というのはず一つとあったと思いますよね。公然と神話をこわそうとする動きがでてくるのはもっと後のことですね。

ただ僕の場合には、公然と神話を覆えすとか、そんな大胆不敵な人間じゃないから（笑）、そんなことはするつもりはなかったのだけど。だけど、研究の世界では納得のいくように調べてみたいというのが強かった。その結果（一般のそれまで）言われていることとぶつかることになるんですけどね。でもそれはしかたがないし。修士論文（で）ローザ・ルクセンブルクをやってみて、レーニンもローザ・ルクセンブルクも相対化したことになるんですけどね、僕の場合には。

でも相対化したことによってね、別にレーニンが偉くなかったというわけではないし……という気分はもってましたね。

ク：そのイミで、研究に対する自負のようなものをお持ちだったんですね。

西：うーん、やっぱり納得いかなきゃ……。だからといってそこから、それまでの左翼がまちがっているとかね、全否定には、またいかない（笑）。

そんな気分でしたよ、そのころは。

ク：当時の現代史は、村川堅太郎先生の言葉を借りていえば、「古代史研究でいえば、アッシリア史をやっているようなものですね。」ということになるんでしょうが、今とちがってそのころの現代史研究はどういうふうに見られていたのですか？

西：斉藤孝さんなんかも言ってますけどね、特に日本史の方で、明治維新以降は歴史にあらざるという考え方がつよかったわけでしょう。西洋史の場合にはそんなことはない

んですけどね。どうしてもやはり研究の蓄積がなかったし……。それから実践運動なんかやっている人が急に古代史なんかできないわけですよ。ちゃんと、せめてラテン語・ギリシア語ができなくちゃあ……。そうすると現代史の方がとっつき易いんですよ。ということもあって、あまり学問的ではないと思われていたわけですよ。

ク：やっぱり実践運動なさっていた方で、現代史にすすまれる方は多かったんでしょうか？

西：と思いますね。ええ、もちろん例外もありますよ。でも全体としては。……………亡くなった藤原浩先生という、イギリス中世史研究の秀才がおられたんだけど、「なんでラバッコ条約なんてやるんですか？本当に重要ですか？」っていわれたんですよ（笑）。

2. 『広く歴史を見る目』

ク：だいたいその時代の雰囲気はわかりました。先生の当時の問題意識が、まわりのアクチュアルな状況と深く関係をもっていたということはわかったのですが、さてその頃から四半世紀の時をへた現在では、先生の問題関心は何か変化したのでしょうか？それとも基本的に同じままなのでしょうか。

西：ま、ズルイ言い方をすれば、歴史というのは非常に多様な面をもっていて、単線的には進まない（笑）ということ、一方ではもう素直にみとめている。だけれど、雀百までというところもあって、すべてが相対化されてしまって、なるようになるのがいんだというような気はないですね、やっぱり。

ク：当時に比べて、現在では問題関心が多極化したというか、悪くいうとタコツボ化しましたよね。他の人が何をやっているのか、同じ専門をやっていないとわからない。

それが一種のアナーキーを形づくっている。どうしてこうなったのだろうということ、ひとつ遡って考えてみたいと思うのですが。

西：それは両面から捉える必要があると思うんですけどね。僕がしょっちゅう言っていることは、やはり自分のアタマで考え、自分のコトバで語れるようになりたいということなんですよね。とくに日本の外国史研究の場合というのは、長いこと輸入史学なわけですよ。ただ横のものをタテにするということだってね、こりゃ、かなり訓練をうけた人でなければできない。ですからある段階までは輸入史学でもしかたがなかったし、それが非常に積極的意義をもったとも思うんです。だけどヨーロッパにおいても、大歴史家の時代ではなくなる。そして個別研究がヨーロッパやアメリカでもどんどん出てくる。その段階になってなお輸入史学というのをつづけて行くとね、本当に主体性というのが失われてくると思うんですよね。ま、'45～'50年代位までは、誰も諸外国のアルヒーフに行って仕事するなんてことはできなかったし、実際の話、僕は史料というものを、こういう形で存在しているものだ、なるほど歴史は史料から分析するんだと実地にわかったのは、アメリカに行ってからですよ。それ以前というのは日本ではそういうものに接する機会はなかったですよ。ようやくそういうことができるようになって、それぞれが史料にもとづいてきっちりした仕事をしなければ、いつまでたっても借りものですよ。実際のことを知らないで大ざっぱなことを言ってたって結局それは幻だっということになるんですよね。だから（多極化の）積極面としては、一見今タコツボ化して、細分化が嘆かれるような状況にもかかわらずね、それを通りこさなければ大きなものはでないだろうと思う。そこをすぐ、細分化しちゃってダメだ、なんて言ってね、大きなことを言いだしたらダメだと思うんです。ですから徹底して細かいことをやるんでいいんだと思う。

ただ、それだけやっていたら歴史学はそれでいいのか、着々進歩しているのかという
とそうではないんで、それは必要条件にすぎない。

ク：では十分条件は何でしょう。

西：やはりもっと広く歴史を見る目というものが、それぞれ養われていかなければならない。自分の狭い意味での専門は、ある時代のある地域・ある問題に限られているかも知れないけど、もっと広い問題についてそれだけ細かいことを一所懸命やったがゆえのね、そういうことをやらなかった人よりは、ものを見る目が出てこなかったら、何のために、ということになるんじゃないかっていう気がしますね。

ク：逆に言えば、細かいことをやるには何か大きい、グランド・セオリーみたいなものの導きが必要な気もしますが、ただ、昔ならたとえば大塚史学であればマルクス理論というものがあったのでしょうが、今ではそのようなグランド・セオリーが雲散霧消してしまった感があります。そこで再び、全体史的視点をもとめよということが前々から言われてきていて、それで例えば最近の社会史研究の動きなんかが出てきているように思われます。先生は具体的にその視点をどこにおかれますか？

西：うーん、いや社会史といえね、そのへん混同されていると思うけれど、政治史とか経済史とかに並ぶ分野としての社会史というものがあると思うんですね。もう一つは、最近刺激を与えているのは、そうではなくて、全体史としての社会史という考え方でしょう。僕の場合、この全体史としての社会史というのは、あんまりよくわからないス。

ク：僕もよくわからないんですけど。

西：全体を見る目というのは、日本の場合最初にマルクス主義によって与えられたんですよね。で、それに対する批判が出てくるのは当然なんですけどもね。今まで全体を見る目というのが無かったわけでは決してない、と思うんですよ。ただ、一つの分野としての社会史というのは、これは非常に面白いんですよ。他方、やはりおそらく外交史なんかより（社会史は）むづかしいと思うんですね。とくに外国に関してやるのは。

非常にコトバのセンスがなくっちゃならないし。やはり自分の素質にあった分野をえらぶのがいいんじゃないかと思うんですよね。だから社会史をやる人もそれが自分の素質にあっているというところから選ぶのがいいと思う。

ク：今後、歴史学はどういう方向にすすむべきであるのか。あるいはこういう点が、今の歴史学の健全な発展を阻害させているのではないかといった点について、何かお考えになることがあったらお聞かせ下さい。

西：その前に、（西川氏の）略歴から言うとね、僕はアメリカに三年行っているんですよ。それは一年・二年上の世代がいわゆる留学を始めたわけですよ。でまあ、自分も行ってみたいと思ったわけで。

ただドイツ史やってんだからドイツに行く方が自然なんですけどね、たしか旅費が出なかったのかな、そのころのドイツ行きは。それでハルガルテンという先生の名前を知っていたから、出版社気付でもって手紙を書いたら返事がきたんですね。それがきっかけとなってアメリカに行ったんですよ。アメリカで、当時はドイツから押収されていた文書が保管されていて、それで史料というものがこういうものか、と初めて知ったんですね。その意味では僕にとってアメリカ体験というのは大きいんですよ。それと、ドイツ史をやっているのにまずアメリカに行ってしまったというわけで、ドイツという国にあまり情情的にのめりこまないですよ、僕は。で、帰ってきたのは'62年ですけどね、その時はまだ高度経済成長以前で、二度と外国に行くことはできないだろうと思いましたよ。そしたらもう数年のうちに何か世の中かわってきちゃって、という感じですね。……………（専門の細分化・タコツボ化というのは）日本だけの現象じゃないと思いますけどね。現代史研究会というのがありますけど、あれは、歴史的にいつて結局はヨーロッパ史中心なんだけど——関西にはドイツ現代史研究会というのがあるんですよ。けど東京の場合には、ヤセがまんしながらもね、「現代史」研究会としてつづけてるんです。一方には、ロシア研究会・東欧史研究会ってできてくるわけでしょ。それはもう研

究がこまかくなってゆくのだから当然なんだけどね。自分の国だけ見てもわからないのと同じでね、ドイツ史だけやっててはドイツ史はわからないというところがあると思うんですね。ドイツの特徴だなんて言ってることが実はイタリアにもあったり、ということはあるわけでしょう。そういうイミで自分が対象としている地域・あるいは時代以外のことをやっている人と話し合うことが、結局は自分の仕事を大きくしてゆくと思えます。それはかなり意識してやるべきだと思います。

ク：ではそのように仕事を大きくして行って、最終的に、例えば現代史なら現代史が目指すべきこととは何でしょう。

西：とくに現代史が他の時代の歴史に比べて重要だというつもりは全然ないですけどね、ごく一般的に言って、歴史をやる人間が百人いたら、そのうちのかなりの人間が現代史をやるのが当然じゃないかと思うんですね。古代史となれば、かなり訓練された、一騎当千という人々がね、やるという方が健全じゃないか、分業体制として自然じゃないかと思う。

ものを知ろうとしてゆく場合、自分を中心に、まずその周辺からやるわけでしょう。だから時代的にも地域的にも近い、日本現代史がいちばん（たくさん）いておかしくないわけですよ、ただそれだけやっててはわからない。オヤ、と思ったときに他の世界、古い時代も知りたくなる。知りたくなった時にそこをきちっとやっている人がいないと困るんですよ。だから古代史・中世史をやる人が、何かこう、自分は何のためにやっているのか、現代とのつながりはどうなっているんだろうとずいぶん悩むらしいけど、僕は逆説的にそんなコトは心のうんと底にあればいいことだと言いたい。ムリに現代的関心と結びつけたりするとロクなことない。そうではなく、現代を知ろうとした人が、はて昔はどうだったんだろうと思ったときに答えることのできるようにきちっと調べておいてほしい。

ク：はは。

西：現代史をやっても同じなんですよ。現代史やっているからといって、自分の生き方とか現在の世界の政治の行末について他の人よりよく分かるなんてことはないですよ。やっぱり次元のちがうことだから。だからそういう意味で、特に現代史が重要というわけではないけれど、分業体制としては身近な時代や地域の人がたくさんいるのがごく自然だろうと。その点ちょっと日本の歴史学界はおかしいかなという気がする。

その上で言えば、僕が一番面白いなあと思うのは、世界史なんですよ、大げさなこと言っちゃうと。どの地域やってもわからないことはいっぱいあるし、わかれば面白くなってくるし、そういう中で自分はさしあたりヨーロッパの現代を守備範囲としてやっているということであって。そこをちゃんとやることで他の地域の理解も進むであろうト。だけど最終的には自分の世界史のイメージが少しでも豊かになれば自分として多少はやってきたかがあるなあと思うし、歴史学全体も結局はそこをめざしているんじゃないかなという気がしますけどね。

3. 『自分はどこから来てどこへ行くのか』

ク：話はかわりますが、何故人は歴史を学ぶのでしょうか？

西：僕は人間というのは、本能的に、自分はどこから来てどこへ行くのかを知りたがるもんだと思います。……このごろはやりのコトバで言えばアイデンティティーというようなことを（笑）いろいろさぐろうということがあるんでしょうけどねえ。そういうコトバを使わないにしても「（昔は）どうなっていたんだろう」というのはかなりコレ、素朴な疑問としてありうると思うんですね。

ク：その問いがなくては人間は生きてゆけないものなのか、それともなくても生きて

ゆけるのか……？

西：いや生きてると、疑問が出るんじゃないスカねえ、自分がどこから来たかという事は。それはねえ、どこから来たのでもよくどこへ行くのでもよい生の一瞬というものもあるかもしれないけれどもねえ（笑）。人間たぶん誰しも持つ問いかけに……みんなが歴史を調べるということをしていいし、その中で多少その為に専門に時間を使うべし、そのかわり奨学金なり給料なりをやるから、という制度の中に生きている歴史研究者がいる。それだけにすぎないんじゃないでしょうかねえ。

ク：では、その、人はどこから来てどこへ行くのかという誰でもが持つ根源的な疑問に、歴史学は実際に応えているといえるのでしょうか。或いは、世の中のニーズというものにこたえているのでしょうか？

現実にはむしろわれわれは、専門内部での狭い意味でのニーズにこたえることだけに終始しているのではないのでしょうか。

西：まさに一面ではそうでしょうね。ただ専門の論文が、直接ごく一般的な要求にこたえることは無理なんであって。いくつかの段階があると思うんですね。歴史教育というのは非常に重要な問題として考えなけりゃならないし。（また）今の世の中では、ジャーナリズム——それに自分が書くということではなくてね、編集者とか記者とかが歴史の本をよんで、歴史に関して的確な判断をもってくれるようになる。だから一方では、小学校からの学校という制度があるし、他方ジャーナリズムがあるし……。たくさん人の力でようやく広汎な人々の要求に応えることができるわけですね。

自分の中にも二つ役割があるわけだけど、自分がこれだけはいいたいということを伝えてゆくという努力が非常に大事だろうと思う。ともすれば歴史教育なんか、あんまり関心もたない人が多いですけどね。その点でいえば、戦後40年、それまでとはずいぶんちがった歴史像ができていのに、日本人の歴史意識にどれだけ変化がおこったかと考えると、歴史関係者が力不足だったと言わざるを得ない。でも40年でできないから

と言って、そう簡単なことではないのだから、別に嘆くことはない。

ク：さて現在の状況——この1987年という今の状況——については、それと何かアクチュアルな関りを意識なさることはありませんか？昔にくらべて状況はかなり変化したと思いますが。

西：やはり学生のころに比べれば、世界のいろんな地域のいろんなことがらに自然に関心をもてるようになりましたからね。それがすぐどういう結果を生むかわかりませんが、極端に言えばどこをやってもおもしろい。だから、最初は人から与えられてもいいですけどね、やはり自分が何故だろうという関心をもって、その答えを求めるといのが、一番、僕は——歴史に限らないですけど——基本だと思うんですね。それさえあれば、次から次と研究はすすんでゆくはずだし、広がってゆくはずだと思う。

ク：先生ご自身では、今「何故だろう」とお考えになっていることはありますか？

西：いっぱいあるんですけど、さしあたって今がけている国際社会主義運動のことをまとめないとね（笑）。力に余裕があったら、世界各地の近代化の比較研究なんて面白いだろうと思いますけどね。

ああ、一つぜひ言っておきたいのは、僕は日本史・東洋史・西洋史という区分法は、歴史学の発達にとって有害無益だと思うし、大学の中にこう三つに分かれていることが、タコツボ化を促進しているというコトね。とくに西洋史の諸君にいいたいのは、努力しない限り自ずと非常に狭い西洋史的雰囲気にはたっっちゃうぞ、ということ。

ク：西洋史の研究室は非常に居ごちがいいんですね。だまっていると知らないうちに流されて行ってしまいますねえ。

西：ハイ。戦争直後の歴史学研究会なんていうのはね、分野をこえた討論がよくできた場なんですけどね。歴史学研究会だっただんだんとわかれてゆく状況になってんですよ。それはさっき言った、学問が細分化してゆくという——これは当然だし、それを通りぬけなければならないことですから、文句言ったってしょうがないというか、一方で

は促進したっていいと思う——だけど同時にねえ、うーん、かなり努力して制度の外に出たり他の分野の人と話すことによって自分の研究自体すすむと思いますね。

4. 『“手ざわりの歴史学”をめぐって』

ク：そろそろ終わりに近づきましたが、先生はこの仕事をやっていてよかった、と思われる時というのはどういう時ですか？

西：あまりないですねえ（笑）。だけど今さら他に商売替えできませんしねえ。

ク：日常的な、ごくささいな場面でもいいんですがね、仕事の喜びというか……。

西：（しばらく考えて）疑問に思ったことに解答を与えてくれるような史料にぶつかったときというのはうれしいですね、やっぱり。

ク：そうですね、そういう時ってやっぱり嬉しいもんですよね。

それだけですか？

西：（笑）そうですねえ……。あまり自信をもって言うことはないんですけどね、酒場なんかでいろんな専門や商売の人にあうでしょう。そういうとき、いわゆる床屋談義になるわけですよ。「イギリスでは……」とか「ドイツでは……」とか。「いや、そんなことはありません、そうじゃないですよ」とかなり確実な手ざわりのあることを言えると、まあ勉強してきたのもムダじゃなかったと思うわけですよ。それはもう少し広くいうと、何ていうかな、手ざわりの歴史学、これが多くなってゆけばずいぶんちがってくるんじゃないかな、と思う。

だから評論家が、ひょいとドイツに行って「ドイツでは……」と言ったのとは違うことを言えなきゃならないし、言えると、まあまんざらではないな、と（笑）。

ク：何か他にメッセージがありましたら。

西：研究三昧で生きるということはいいことでしょうけど、それができるとするのは、ある制度的な保障があるからで、その意味では学術体制とは、自分の研究自体に非常に密接に関係しているんですね。その学術体制が、いろんな政治的変動の中であやうくされるということがあると思うんですよ。その意味で決してこれは義務感からではなくて、自分の研究の条件をまもり、よくしてゆくという自分中心の考えからしてもね、やはり学術体制の問題に関心を持ってほしい。このままでゆくと、自然科学の先端技術の方ばかりすすんで、もう虚学なんてのはほぼ出される状況にあるわけでしょう。だから虚学の意味というのを……。虚学の無くなった社会というのは僕は文化のない社会だと思うから……。かなりそういう意味で今、政治状況はよくないと思うんですね……。抵抗しようと思ったら、その時には抵抗の手段が奪われてしまっているような状況になってからでは遅いんで……。

ク：ではこのへんで。どうも有難うございました。

ここのコーヒー代はクリオから出るとお思いますので……

西：でも、どうせあとでクリオを買わされるんじゃないなあ（笑）。



【おわり】